

第二回村研大会を顧みて

原 宏

仙台で開催された第一回村研大会を無事終えて色々考えさせられる事があったりと思いつくまゝに述べてみよう。

一、地方にいる者——特に私のように青年者の高校教師を余儀なくせられてゐる者——にとつては年に一度の大会は絶好のチャンスであるから、社会学会大会に引続いて持つとしても、社会学会の農村部会の延長であつて賣いたくない。そのためには会の持ち方、進め方に多少工夫を欲しいものだ。その意味に於て討論会に重点を置くようにしたい。即ち共同課題の下に数名に研究発表をお願いし、ヒナ壇式の討論会（往々にして報告者への質問になりがちであるので）をやめて *round table* で大円卓式の *symposium* 形式で行い、司会者は共同

課題の *topic* の順に一般會員から質疑をうけたり、報告者から或は一般會員から意見や提案をうける。報告者と一般會員、報告者と報告者、一般會員相互間の批判、討議の *circulation* をはかる。

二、それには一般會員が所謂專家にならないうちに *theme* を *standardize* するだけなく、*topic* としても *research method*、*logic*、*standardization* も考えなくてはならない。かつて「研究通信」には宿題の *topic* は経過と共に流されたが、私の言いたいことはむしろ *operator* にとつても一般會員にとつても *operator* の *standardization* と同じことも望みたいのである。つまり *operator* の必ず用いなければならぬカラフ、*diagram*、ふれねばならぬ *analysis point*、さういつたものの *minimum* を決めるべきだと思ふ。 *operation* としての実績をあげるためには少々窮屈かも知れないが、村研としてはさうありたい。九学会の大会のようにはありたくない。

三、共同課題については各専門分野に立つ問題点、盲点を考えると共に各地域の特殊相を全国的な普遍相と対比して考えること。さういつた意味で私は宮崎大学の高倉氏のいわれた「兼業農家」の問題をあげたい。特に都市近郊村落においては所謂「雇工農家」の問題があるが、かつては主として農業経済分野の人々によつて幾多のすぐれた研究業績が報告されているが、殆んど

第二次大戦前か戦時中のものである。然るにこの問題は戦後の今日と雖ども都市における近代産業のシステムの変貌と共に再び新たな焦点を示しつつあるといわねばならない。来年の宿題には困難であれば、早晚取上げねばならない問題として皆さんの熱意を乞ふ。新刊書「日本農業の社会学——兼業農家の実証的分析——」四宮恭二著を先日来ひもといっているがソシオロジー・プロパーであるか否かは別として村研の盲点とならねばよいかと、ひとり勝手な焦り心から考えている。

しかし村研草創の大会としては甚だ有意味であつたし、松島見学をしないで、さい果の筑紫に帰つても悔はなかつた。村研こそ年令をこえて、分野をこえて村落を愛する人々の集いであることを肝に銘じた。

(福岡県立東筑高校)